

## カール・ポラニーと比較体制論

長尾史郎

Karl Polanyi の名は日本では奇妙なほど知られていないが、その主たる理由は、彼が特殊な社会主義者であって、日本のように二つの経済学に峻別されている環境では、その所を得ないということであろう。（しかし、日本でも最近いくつかの文献を通じて紹介されつつある——〔8〕～〔10〕。）これに対して外国ではしかるべき敬意が彼に払われているようである。例えば〔2〕は anthropology 一般、ことに economic (Polanyi によると——〔5〕, p.121——また “political”) anthropology の文献として重視されている。また、例えば〔7〕一冊には Polanyi から二つも論文が載録されているのも彼への注目ぶりを示しているといえよう。

Polanyi がもっと明示的に評価されている例としては J. Hughes〔11〕をあげることができる。彼は、これまでに存在した「社会哲学」の理論を次の四つのカテゴリーに分類している (p. 197)。すなわち、(1)古典派経済学、(2)革命的社會主義、(3)改良社會主義、(4)「社会学的」潮流。そして、この第四の潮流を、Polanyi〔1〕において「頂点に達する」として、彼を四大潮流の一つの代表者に行している。

Polanyi は、ふつうの意味での「比較体制論」（資本主義と社会主義との比較）にのみ関心を向けているのではない。彼の構想はもっと大きく、マルクスのそれに匹敵するものといえよう。彼は何よりも経済史家であり、「経済人類学者」である〔6〕。しかし彼が経済史と人類学に関心を示すのは、それ自体に対する興味もさることながら、何よりも彼の言う「大転換 (the great transformation)」(これは〔1〕の標題である) の史的諸前提とその必然性・根拠

を探索するための手続きである。この「大転換」こそは、彼にとっての真の「体制」の移行なのである。

「大転換」とは、laissez faire ないしは「自己制御的市場 (self-regulating market)」への信仰からの脱却と社会の復位である。これは同時に経済をそのあるべき姿——社会の中に埋め込まれた (embedded) 状態——に戻すことをも意味する。彼が人類学に目を向けるのは、こうした自己制御的市場が永遠のインスティテューション制度ではなかったことを示すためであり、また経済史に注目するのは、この自己制御的市場の一定の実存が形成されていく過程をたどるためであった。この過程は同時に、経済の肥大による矛盾の累積過程でもあった。彼が狭義の「比較体制」に対応するものに目を向けるのは、この文脈においてである。すなわち、この社会の復位——大転換——の形態としての社会主義が浮かびあがるのである。

以上のように見るとき、多くの点でマルクスとの相類似は明らかになる。すなわち、自己制御的市場の最高の発点としての資本主義（ただし自由主義的——この点後述）の批判という点でも、さらに、この制度の歴史性の検証としての古代史への注目 (Marx-Morgan に対応して Polanyi-Malinowski)、さらには (マルクスにとっては「否定の否定」である) 社会主義の展望、等々である。これらの類似にもかかわらず、またマルクスへの一定の尊敬（彼が“popular Marxism”というとき、「真の」マルクスと区別したがっているふしがある）にもかかわらず、以下で展開するように、かなり本質的な点で両者は異っている。この点について、彼の妻の娘 K. Levitt [5] は、彼は「マルクス主義者ではなかったが、なおいっそう社会民主主義者ではなかった」(p. 113) といっている。しかしこれは、どちらかという具体的な政治路線にかかわることであるので、ここではより理論的レベルでの検討を続けることにしよう。

上述の「社会の復位」——「社会的転換」([1], p. 29) ——を Polanyi は歴史的に必然的な過程とみている。それは個々の国の歴史が左右できることではなく、ただその歴史的必然をどのように担うか——抵抗しつつか、積極的

にそれに倅さすか——が異なるだけである。

「あたかもこれら〔の国々〕が、この社会的変化の過程を創り出したように見えるかもしれないが、実際には、それらの変化の受益者にすぎないのであって、自己の目的に報仕させるためにこの傾向を歪めさえするかもしれないのである。」(Ibid., p. 28) 「これらの〔社会的変化の〕問題は、それによって漁夫の利を占めている諸国家によって創出されたものではない。それらは現実のものであって——客観的に与えられており——、個々の国の運命がどうなるうとも、存在し続けるものである。」(p. 29)

こうした必然性と個々の国の歴史の関係は、前者の傾向に応じた国(とその体制)の隆盛と、またそうした国におけるその必然性のヨリ旺盛な発現——およびその逆——である。

個々の国は「基礎に横たわる社会的過程に対するそれらの関係に応じて、〔発展が〕助長されたり、阻まれたりした。しかし、同じことはこの社会的過程自体にもあてはまる。すなわち、ファシズムと社会主義とは、その信条の普及を助けた個々の強固の隆盛に、その担い手をみ出した。」(l. c.)

Polanyi は、「大転換」の時機を第一次大戦前後からこちらに見ているのであるが(彼は、この転換と大戦争との関係を強調している——p. 28)、そのような社会的過程の現れとして、上述のファシズムと社会主義、さらにニユーディールをあげているのである(p. 29)。この三つの体制があげられていることにさしあたり注意しよう(第三のものは「修正資本主義」である。とくに、それは価値判断とは独立のことである)。

「これらの社会的運動〔社会主義とファシズム〕の真の内容は、ただ、——良かれ悪しかれ——その超絶的(transcendent)性格が認識され、その運動に報仕することになった個々の国の利害から切り離して見るときにのみ、把握することができるのである。」(p. 29; 強調は引用者。)

以上のような、社会的過程の必然性という構成は、一見、マルクスのそれを彷彿とさせる。すなわち、後者の場合は、経済的必然が個々の国の偶然性・個別性を貫いて自己を貫徹するのである。どちらもその点で決定論である。

だが、「相似はここで停止する」。Polanyi のそれは「社会決定論」とでもいえるが、その共通点は、せいぜい、理論は何らかの法則性を指摘するものであるという点にあるにすぎない。Polanyi の全体系は、まさにマルクスや経済的リベラルの「経済決定論」の批判の上に成立しているのである。この点について彼は端的に、十九世紀の文明の崩壊は、中んづく、「利潤率の低下だとか過少消費ないし過剰生産といった、経済法則とかいわれているもののためではない」(Ibid., p. 249) といっている。

「機械時代」は「市場」という名の制度を生み出し、社会全体がこの制度の名を冠していたが(「市場社会」)、われわれが抱く社会と人との観念はこの制度にもとづいて形成された、と Polanyi は述べている。それは次のような構成になっている(“Our Obsolete Market Mentality,” [2], pp. 60-61)。

(1) 人の動機は「物質的」および「観念的」の二種類であるが(「この二分割自体が……恣意的である。」——Ibid., p. 72)、日常生活の組織の基礎となるのは前者である。

(2) 社会の諸制度は経済システムによって「決定される」。

この二つの見方は、功利主義的リベラルも(「通俗的」)マルクス主義もともに抱いているものであるが、第二点についてはマルクス主義の方がより強く主張している。そして、Polanyi は、この主張は市場社会においては正しいとしている。

「ただし、ただそのような社会においてのみである。過去については、そのような見解は時代錯誤に他ならないし、未来については偏見である。」

(p. 61.)

(なお、マルクスの経済決定論については、Dalton in [2], pp. xvi-xvii も参照。) マルクス主義が経済決定論の採用によってその理論構成にこうむっ

た歪みは測り知れないものがあり、それは当然その未来社会論——社会主義理論——にも影を落さざるをえなかったであろうが、本稿ではこれ以上ふれない。

比較体制論の最新の集約点の一つは、集権と分権の問題、および「混合」体制の評価の問題である。しかし、Polanyi にあっては、混合体制はほとんど自明のこととして受けとられているように思われる。そのことの原因の一つは、明らかに、彼にあっては社会主義がマルクスにおけるように経済決定論的に、そして、その内容としての二大階級対立の結果として、導かれてはいないということと関係があるであろう。その結果、結論的には社会主義を主張することになっても、社会主義をマルクスのような意味では資本主義に対置していないのである。

この問題に対する彼の基本的視点——そして、今日の環境問題を契機とする経済学への反省とひき比べてみて、彼を特に新鮮なものと感じさせるところのもの——は、「工業〔産業〕社会」、「工業文明」という概念である。それは、資本と労働の対立以上のものなのである。

「われわれの世代にとって資本主義の問題と思われるものは、実際には、それよりもはるかに大きい、工業文明の問題なのである。経済的リベラルはこの事実<sup>1</sup>に盲目である。経済システムとしての資本主義を擁護するとき、彼らは機械時代の挑戦を無視するのである。」(Ibid., p. 76; 強調は引用者。)「自己制御的な市場というユートピア的実験がもはや単なる記憶になってしまう時にも、工業社会は存在し続けるであろう。」([1], p. 250; 強調は引用者。)

こうした文脈の中に、彼は社会主義をも位置づけるのである。

「社会主義とは、本質的には、自己制御的市場を意識的に民主的な社会の統制に服させることによってそれを越えようとする、工業文明に内在的な傾向のことである。これは、工業労働者——なぜ生産が直接に統制され

てはいけないのか、なぜ市場が自由な社会における有用な、だが従属的な一特徴以上のものであるべきなのかを理解できない工業労働者——にとっては自然な解決なのである。社会全体の観点からすれば、社会主義は、単に、社会を諸個人の際だって人間的な関係にしようとする努力——これは西ヨーロッパでは常にキリスト教的伝統と結びつけられているものである——の延長にすぎない。経済システムの観点からすれば、それは、反対に、直接の過去からの根本的な訣別である。なぜならば、それは、私的な貨幣取得を生産活動への一般的誘因とする試みと手を切り、私的個人が主要な生産手段を処分する権利を認めないからである。」(Ibid., p. 234; 強調は引用者。)

だから、社会主義は、「社会における産業の位置をシフトさせて、機械の非本質的〔外的〕(extraneous)な諸事実を取除くことができるようにする試み」の一部なのであって、これを彼は「産業〔工業〕民主主義(industrial democracy)」と呼ぶ([2], pp. 59-60)。

「産業民主主義の追求は、単に資本主義の諸問題への解の追求だけではない——それが大部分の人々の考えていることではあるが。それは、工業〔産業〕それ自体への解答の追求なのである。ここには、われわれの文明の実体的な問題がある。」(l. c; 強調は引用者。)

すなわち、社会主義の課題は、「われわれの生活様式の工業的環境への適応」(p. 73)なのである。

「工業社会」ということの含意ないし帰結は、それが「複雑な(複合的)社会(complex society)」だということである。人類はまだこの環境への適応を完成させていない。

「工業化は、人類の長期の存在に不安定に継ぎ足された継穂である。その実験の結果はまだ評価を済ませていない。」(p. 60.)

そして、問題はこの複雑な工業社会において個人の自由を保障することである。

「現在かくも熱を込めて提起される個人の自由の問題も、この焦眉の問題〔工業化——S. N.〕のただ一つの側面にすぎない。実際には、それはずっと広く深い必要——機械の全面的な挑戦に対する新たな反応の必要——の一部分を構成するものである。」(l. c.)

この個人の自由の保障は、しかし、社会（中んづく経済システムと区別された）とその体现者としての権力・政府の問題を呼び起さざるを得ない。

「一般的な種々の根拠からして、『国家の死滅』という共産主義者の期待は、私に言わせれば、リベラル・ユートピアニズムの諸要素と制度的自由 (institutional freedoms) に対する事実上の無関心とを結合したものである。……工業社会は複雑な社会であるということは否定できず、いかなる複雑な社会も、中枢における組織された権力なしには存在できないのである。しかしまた、この事実は、具体的な制度的自由の問題を共産主義者が看過することの言いわけにはならない。個人の自由の問題がとりあげられなければならないのは、この程度のリアリズムの水準においてである。権力と強制が欠如している社会は不可能事であり、また強力 (force) が役割を演じないような社会もそうである。」(p. 73.)

「いかなる複雑な社会も、政治的性格をもった立法的・行政的機関の機能なしにはやっていけない。諸グループの利害の衝突は工業あるいは国家——そのどちらか、あるいは両方——の諸器官の麻痺を結果したが、それは社会への直接的な危機を作り出したのである。」([1], p. 235) 「統制は、複雑な社会における自由の普及と強化の唯一の手段である」(p. 257)。

ここで注目すべきことは、社会主義内部の諸グループ（「階級」）の利害の対立を無視するユートピアに対する批判であろう。他方では、個人の自由の制度的保障の重要性が強調されている。

「個人的〔人格的〕自由についていえば、それは、われわれがその保持、いな、その拡大のための新たな防衛手段を意識的に創出する程度だけ存在する。確立した社会においては、不順応（反対）の権利が制度的に保護されなければならない。……強制は決して絶対的なものであってはいけない。『反対者』に対しては、彼が引きこもるための適所や、彼に生きるべき生活を残す『次<sup>セカンド</sup>善<sup>ベスト</sup>』の選択の余地を提供すべきである。」（p. 255.）「権力の濫用の源泉としての官僚主義に対する真の解答は、強力な規則によって保護された、恣意的自由の領域を創出することである。」（*l. c.*）

彼がこうした「権力」の問題を強調する背景には、彼の一面をなしている哲学的ないし宗教的観点がある。彼によると、西洋の意識の基礎には、三つの認識（knowledge）、すなわち、死、自由、社会の認識があり、前二者はそれぞれ旧・新約聖書に啓示してあり、第三のものは、特定の個人に由来しないが、特に Robert Owen と結びつけられるとする（〔1〕, p. 258 A）。この認識が諦念を与えるが、さらにそれを通じて希望をも与えるものなのである（なお、〔5〕, p. 113 も参照）。

「諦念は常に人の力と希望の泉であった。人は死の現実性を受け入れ、自分の肉体的生命の意味をその上に築いた。彼は自分が失うべき魂を持っており、死よりも悪いものがあるという事実諦め、そして自分の自由をその上に築いた。現代では、人は、自由の終りを意味する社会の現実性に諦めた。しかし、ここでもまた、生命は究極的な諦念から生じた。社会の現実性の従容たる受容が、除去の可能なあらゆる不正と不自由を除去しようとする不屈の勇氣と力を人に与えたのだ。……これが複雑な社会における自由の意味である……」（p. 258 B；強調は引用者）。

ついでながら、上述のように、リベラルに対する対抗では一致する社会主義とファシズムの分岐点は、後者が社会＝権力の現実性のみをとり、自由の追求

を捨てたことだとされる (p. 258 A)。

以上のような社会主義の位置づけにおいては、社会主義と市場という問題にはそれほど大きな関心は寄せられていないようである。あるいは、市場の利用は自明のこととされているともいえる。上の引用 ([1], p. 234) でも市場を「有用な、だが従属的な一特徴」としているし、また次のようにもいう。

「……市場社会の終焉は決して諸市場の欠如を意味しない。それはいろいろな形で存続して、消費者の自由を保障し、需要の変化を示し、生産者の所得に影響を与え、そして計算の手段として役立ち続けるであろうが、経済的自己制御の器官であることはやめるであろう」。(Ibid., p. 252.)

ここにあげた、計画のもとでの市場の役割は、経済的機能としては当然予想されるものであるが、もう一つの観点は、市場の社会的機能とでもいうべきものである。

Polanyi によると、市場は、これに固有とされる周知の諸悪(「悪い自由」)を生み出したが、同時に、「だいたいにおいて副産物として」、「良い自由」——良心・言論・集会・結社・職業選択の自由——をも生み出したが、これらは「それ自体として尊重」される ([2], pp. 74-75)。しかし、こうして得られた自由を、社会主義においても、市場という制度を通じて保障すべきだとは、彼は必ずしも言わないようである。しかし、ここに、個人の自由の制度的保障の比較体制論的問題点の一つがあると考えられる。

Polanyi も、Mises らと社会主義の「計算論争」を戦わせているのであるが ([3], [4]), 古くなった論争自体はともかくとして、ここにもすでに、以上のような認識の萌芽が見られて興味深い。彼によると、社会主義経済の概念は「生産の最大効率」および生産物分配における「社会正義」——もちろん、これらは資本主義下では実現しないとされる [3] ——だけで尽くされる ([4], S. 220)。それゆえ、市場経済対市場のない経済、「集産主義=集権制」対「サンジカリズム [=生産単位による分権]」という対立は本質的ではないことになる ([4], S. 221; [3], SS. 378-9)。

いずれにしても、Polanyi に社会主義と市場というかなり局限された問題への、詳細な、かつ現在要求されるような具体性を持った論及を求めることは無理なようである。

いかなる政党にも、いかなる政治運動にも参加しなかった彼は ([5], p. 113), 晩年, フルシチョフの新綱領に「人間的社會主義」を見, そして平和共存のための理論誌 *Co-Existence* を創刊し, その第一号出版の直前に他界した。

### 文 献

- [1] Polanyi, Karl, *The Great Transformation (The Political and Economic Origins of Our Time)*, Beacon Press, Boston, 1968.
- [2] Ditto, *Primitive, Archaic and Modern Economies (Essays of Karl Polanyi)*, ed. by George Dalton, Anchor Book, New York, 1968.
- [3] Ditto, „Sozialistische Rechnungslegung,“ *Archif für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*, 49. Bd., 1922.
- [4] Ditto, „Die funktionelle Theorie der Gesellschaft und das Problem der Sozialistischen Rechnungslegung (Eine Erwiderung an Prof. Mises und Dr. Felix Weil),“ *a. a. O.*, 52. Bd., 1. Hft., 1924.
- [5] Levitt, Kari, “Karl Polanyi and *Co-Existence*,” *Co-Existence*, Vol. 1, No. 2, 1964.
- [6] Bohannon, P. and Dalton, G., “Karl Polanyi 1886-1964” *American Anthropologist*, Vol. 67, Dec., 1965.
- [7] Rca, K. J. and McLeod, J. T., eds., *Business and Government in Canada : Selected Readings*, Toronto, London, Sydney, Wellington, 1969.
- [8] Heilbroner, Robert, *The Making of Economic Society*, 3rd. ed., New Jersey, 1970. (邦訳) 小野, 岡島訳『経済社会の形成』, 東洋経済新報社, 1972.
- [9] Fermi, Laura, *Illustrious Immigrants. The Intellectual Migration from Europe 1930-41*, Chicago, 1968. (邦訳) 掛川, 野水訳『亡命の現代史』, I, みすず書房。
- [10] 「(リーディングズ・政治経済学の視点) 市場制度は人間性を歪める」, 『現代経済』, No. 5, 1968. (“Our Obsolete Market Mentality,” in [2], pp. 59-77 の抄訳。)

(筆者の住所：東京都品川区東五反田4-9-6-401)